ルークの長い旅

はるいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルークの長い旅

【Ｎコード】
Ｎ８３１１Ｅ

【作者名】
はるいち

【あらすじ】
なんでも屋を営業しているルークの元にある日、１人の女性がやってくる。その出会いが彼を大きな冒険へと旅立たせる。

Chapter1－1：出会い（前書き）

Ｃｈａｐｔｅｒ１－１：出会い

「おいおい、どうして仕事がこないんだよ」

なんでも屋を始めてもう既に２ヶ月が経った。
１０日に１度仕事が来たらいい方で最近はかなり暇だ。

「このままだと餓死の恐れもある・・・」

実をいうと、既に２日何も口にしていない。
とりあえずどんな仕事でもいいから来て欲しい。
まだ１８歳なのに餓死は洒落にならねぇからな・・・。

コンコン

あれ？今、ノックの音が聞こえたような気が？
いや、人生そんなに甘くないはずだ・・・。
多分、幻聴だ。空腹が幻聴を生み出したに違いない。
こんなのが聞こえるとはそろそろヤバイな・・・。

コンコン

「・・・・・・・・」

今度は幻聴じゃない。
俺の願いが届いたんだ。神様、あんたもまだまだ捨てたもんじゃないな。
餓死してそっちへ行ったら殺してやろうかと思ったが許してやる。

「はいは～い、今行きま～す」

久しぶりの仕事の依頼だから嬉しさのあまり声が上擦ってる。
まぁ、気にしない。この嬉しさをわざわざ隠す必要はない。

ガチャ

俺は勢い良くドアを開いた。
すると、そこには俺と同い年ぐらいの女性が立っていた。

「あの、ここはなんでも屋なんですよね？」
「・・・・・・。あ、はい」

思わず無言になってしまった。
だって、こんなに綺麗な人が現れるとは思わなかったからな。
特に長く伸びた金色の髪はあまりにも綺麗でかなり見惚れてしまう。

「あの、どうしたんですか？ボーっとしちゃって」
「あ、いえ。なんでもありません。それより依頼ですよね？」
「えぇ」
「じゃあ、中にお入りください」

俺はそう言って彼女を中へと導く。
彼女はお礼を言って中に入ってきた。

「そちらの椅子に座ってください」

俺は彼女にそう言って自分はテーブルを挟んで反対側の椅子に腰掛けた。

「えっと、最初に名前を伺ってもいいですか？」
「えぇ。私の名前はナターシャ」
「ナターシャさんですか」
「えぇ」

あれ？どっかで聞いたことがあるような名前だけど。
まぁ、深く詮索して逃げられたら困るしほっとくとするか。

「で、依頼の方は何でしょうか？」
「私をある場所まで送り届けて欲しいの」
「護衛ということですね？」
「えぇ、そういうことになるわ」
「えっと、その場所はどこですか？」
「この国の首都、イシュトーラまで」
「イシュトーラですか」

俺のいる国であるアルレインの首都イシュトーラ。
首都だけあってこの国一番の都市だ。
確か、ここブルグからは５０ｋｍほど離れたところだ。
ちなみに俺はまだ１度も行ったことがない。
前々から行ってみたいと思っていたのでこれはチャンスだ。

「最後に護衛を頼む理由を教えてもらえますか？」

これはこの仕事を引き受ける上で最も重要なことだ。
もしかしたら、誰かに狙われてる可能性だってあるからな。

「私、追われてる身なの・・・」

見事に的中してしまった。

敵がいるとなると護衛の仕事はかなり厄介になる。
1人で守りきるのは難しいことだからだ。
だけど、この仕事を手放すわけにはいかない。
飢え死には嫌だからな。

「追われてるというのは？」
「私は首都からここまで連れ去られたの」
「・・・・・。はい？」
「誘拐されたの」

誘拐ときたか。信じるべきか？

「それで逃げ出してきたのですか？」
「えぇ。ついさっき、なんとか逃れたの。多分、今頃は私が逃げたことに気付いたと思う」
「つまり、敵さんはあなたを探している頃だと」
「そう。あの、もしかして信じてない？」
「え、あ、いや、信じてますよ」

これじゃ信じてないって言ってるようなものだな・・・。

「やっぱり疑ってるみたいね。本当は言いたくなかったけど話すことにするわ」
「え？何をですか？」
「私の名前はナターシャ・アルレイン。この国の王女よ」
「・・・・・・・・」

王女？どうりでどっかで名前を聞いたことがあった気がしたのか。
なるほど。王女なら誘拐っていうこともありえるな。

「どうしたの？急に黙っちゃって」
「え、あ、何というか王女様だったなんて余りにも驚きで」
待てよ・・・。相手は王女様なんだよな？
だったら俺はもっと頭を下げるべきなのか？
いや、でも急にそんなことしたら退かれるに決まってる。
よし、今のままでいこう。

「それで、引き受けてくれるの？」
「はい。あなたを必ず首都イシュトーラまで送り届けましょう」
「ありがとう、助かるわ」
「いえ、これも仕事のうちですから」

俺はそう答えながら早く出発の用意をしなきゃなと思った。
それと同時に依頼達成の報酬の事を考えていた。

Ｃｈａｐｔｅｒ１－１：出会い（後書き）

初めての作品はファンタジーなりました。

未熟者ですが、これからよろしくお願いします♪

Chapter1－2：出発

俺はナターシャを待たせ急いで準備を整えた。
といっても、服を着替え数少ない荷物も揃えるだけだ。
１０分あれば終わってしまう。

「ナターシャさん、お待たせしました」
「あら、早いのね」
「えぇ、特に荷物はないですし」
「そぅ。それより私、あなたの名前を聞いてないわ」
「あれ、そうでしたっけ？」
「えぇ」

そういえば言ってなかった気もする。

「俺の名前はルーク。ルーク・レイフッド」
「ルークって呼んでもいいのかしら？」
「何と呼んでもらっても構いませんよ」
「じゃあルークって呼ばせてもらうわね。あと、私のことはナターシャでいいわ」
「でも・・・」
「いいの。さん付けで呼ばれると少し変な感じがするの」
「分かりました。ナターシャと呼ばせてもらいます」
「あと、敬語もやめてもらえる？」
「はぁ・・・。まぁ、構いませんが」
「じゃあ、お願い」
「分かりまし、じゃなくて分かった」
「ありがとう」

王女様を呼び捨て、しかも敬語を使わないで良いとは。
なんとなくいきなり身分が高くなった気持ちになるな。

「じゃあ、そろそろ行こうか。敵さんが来る前に」
「そうね」

俺達はなんでも屋を出てまずは周りを見渡した。
ナターシャの話では敵さんはナターシャの逃走に気付いてるらしいからな。
用心することに越したことはないわけだ。

「そういえば、ナターシャが捕らえられてた場所はここからどのくらいなの？」
「おそらく3ｋｍぐらいしか離れていない場所よ」
「そこから、ここまでは走ってきたの？」
「いいえ、瞬間移動（テレポート）を使ったの」

瞬間移動（テレポート）。
自分が1度行った場所があるところに一瞬で移動する魔法。
単純な魔法に見えて以外にそうではなく中級魔法とされている魔法だ。

「へぇ。っていうかそれは使えば簡単に戻れるじゃん」
「それは無理なの。私の魔力じゃ範囲は5ｋｍ以内になっちゃうのよ」
「じゃあ、それを何度も繰り返せば」
「そんなに多くの魔力を持ち合わせてはいないの」
「そうなんだ。てっきり中級魔法が使えるから魔力も高いと思って

たけど」
「この魔法は中級魔法の中では簡単な方だから」
「そうなんだ。でも凄いな、中級魔法覚えてるなんて」
「あなたは覚えてないの？」
「うん。俺が持ってるのは初級魔法ばかり」
「以外ね。なんでも屋をやってるから結構強いんだと思ってたけど」
「育ったところが孤児院だったからさ。なかなか、魔法石（マジックストーン）が手に入らないんだ」

魔法石（マジックストーン）。
いわゆる、忍者が術を覚える時に使う巻物的な存在の石だ。
石の一つ一つに魔法の力が篭っていてそれを引き出して自分の力に出来る。
もちろん、術者の能力しだいでは引き出せないものもある。
上級魔法にいたっては身につけることのできる人のほうが少ないだろう。
ちなみに俺は今まで初級魔法のしか見たことがない。

「そうなの。今はどれぐらいの魔法を使えるの？」
「５つ。戦闘に役に立つのは３つほどだけど。ナターシャは」
「私はさっきのを含めて８つ。残りは全部初級魔法だけど」
「へぇ。２人で１３個か。敵に遭遇してもなんとかなりそうだね」
「そうかもしれないわね」
「よし、自分達の力も確認したところで今度こそ出発しようか」
「えぇ」
「じゃあ、まずはこれ。神速（ラピッドリー）」

これで普段の５倍ほどのスピードで走れるだろう。

「じゃあ、行こうナターシャ」

「えぇ」

俺達はナターシャの返事を合図に走り出した。
思い切りではないが魔法のおかげで大分早く走れる。
敵に遭遇さえしなければ明日の昼頃にはつくだろう。
まぁ、人生そんなに甘くいくものじゃないだろうけど。

Chapter1－3：戦闘

2時間ほど移動し続けただろう。
辺りは既に暗くなっている。
俺とナターシャは今日は移動をやめ野宿することにした。
王女様に野宿をさせるのは嫌だがしょうがない。

「遅くても明日の昼までにはつけそうだね」
「えぇ、あなたのおかげで助かったわ」
「仕事だから気にしないでよ」

もし俺が有能ななんでも屋だったら瞬間移動（テレポート）だけで依頼達成だったけどね。
でも、よくよく考えたら首都まで行ったことないし無理か。

「とりあえず、今夜敵が襲ってこなければ簡単だろうね」
「えぇ・・・」

ナターシャの返事はどこか暗かった。
まるで、敵が襲ってくるのは予期しているような感じだ。
そんな時だった。

ザワッ

「何だ今の音？」

まるで木の葉が風に揺られたような音だったけど。
今は風なんて少しも吹いてない。
つまり、ナターシャの予感が当たったということらしい。

「ナターシャ、聞こえたよね？」
「えぇ。近くにいるわね」
「厄介だな。数はそこまで多くはないみたいだけど」
「とにかく戦う準備はしないといけないみたいね」
「あぁ、とりあえずこの暗さだと厄介だし。光眼（ライトアイ）」

俺が魔法をかけると俺達の暗かった視界は次第に明るくなった。
昼の時のようにはいかないけど戦うには困らない程度の視界はある。

ザワッザワッ

音が聞こえる回数が多くなってきた。
もう相手は俺達に攻撃が届く範囲内にいるだろう。
おそらく、誘拐していたナターシャには手を出さないはずだ。
つまり最初の攻撃は絶対に俺にしかけてくるはずだ。
しっかりと集中して相手の気配を感じ取れば避けられるはずだ。

「ふぅ。おそらく敵は2人みたいだね」

ナターシャにも聞こえるかわからないほどの小声でそう言った。
なんとか聞こえたらしくナターシャは頷いた。
そして、まるでその頷きが合図かのように相手の攻撃が始まった。

「おっと」

避けることに専念して集中していた俺は相手がしかけて魔法を簡単によけた。
しかし、そこにまるで狙っていたかのように違う魔法が襲ってきた。

「守盾（シールド）」

俺に向かってきていた魔法はナターシャがかけてくれた呪文で俺に届かなかった。
護衛を担当してるのに依頼者に助けられるとは。
とにかく、そろそろこっちからも攻撃をしかけないとな。
俺は2つめの攻撃が飛んできた方向を見て敵を1人見つけた。
そいつをしっかりと見つめ魔法を唱える。

「魔法手（マジックハンド）」

俺が魔法を唱えた瞬間、敵はまるで何かに引き摺られてるかのように俺の元へやってきた。
俺はそいつに向かって持っていた剣で峰打ちを決める。
これで1人は気絶だ。で、あと1人はどこだ。
俺が周りを見渡すとナターシャが魔法に襲われていた。
どうやら、俺の予想とは違いナターシャにも攻撃をしかけているようだ。
つまり、どんな状態だろうと連れて帰ればいいということか。
俺は急いでナターシャの元へと駆け寄り声をかけた。

「大丈夫？」
「えぇ。ほんの少し攻撃を受けただけよ。回復呪文で直せるわ」
「良かった」

俺はそう返事をしながら周りを見渡した。
もう1人の敵は隠れているらしくなかなか見つからない。
相手が見えないんじゃ魔法を使ったって意味がない。
とにかく相手がしかけてくるまで待つしかない。

「ナターシャ、俺から離れないで」
「えぇ」

5秒ほど経っただろうか。
俺の視界に敵が入ってきたと同時に相手は魔法を放っていた。
それは俺の目の前に飛んできて俺は簡単に交わせると思った。
実際には体もしっかりと動き始めていた。
しかし、俺は途中でその動きを止める事になった。
後ろにナターシャがいるからだ。
このままよければナターシャに攻撃が直撃する。
それは避けなければならないと思った俺は左手で相手の攻撃を受ける。

「くっ・・・」

火の攻撃魔法であったため左腕は燃えるような痛みを感じた。
俺はそれをこらえながら目で追っていた相手に剣を構えて迫った。
相手は俺が動けないと思っていたのか突然、迫ってきた俺に驚いていた。
俺は相手のそんな顔を見ながら相手に切りかかった。

「げ、峰打ちするの忘れちまった・・・。まぁ、死なない程度だしいっか」

相手は腹部から血を出しながら地面に落ちていきそのまま気絶した。

「もしかしたら、死んだかもな・・・」

Chapter1－4：到着

俺とナターシャは暗闇の中を走り続けていた。
本当は休憩したいところだけどナターシャに何かがあってからじゃ遅い。
とにかく今は早く目的地につかなければならなかった。

「そういえば、ナターシャを誘拐した奴らって誰なの？」
「・・・・・・。ヴィシュラート一族よ」
「え・・・・」

ヴィシュラート一族。
何千年も昔から外の世界の住人とは交流せず生きてきた一族。
大昔は奴隷のように扱われていた為、長い間アルレインを恨んでいる。
そして15年前。その恨みは1つの事件を引きおこした。
それがヴィシュラートの乱。
当時、一族の長だったジョナサン・ヴィシュラートが中心に引き起こした乱。
彼は一族の中で歴代最強の力の持ち主だといわれていた。
彼はその力を使い禁断の魔法で何匹もの悪魔を呼び出した。
この事態にアルレインだけでなく世界中が危険に晒された。
世界各国はお互いに協力して国からなるべく多くの優秀な魔法使いを集め応戦した。
魔法使い達は多くの命を犠牲にしながら何とか勝利を収めた。
犠牲になった人たちの中には俺の両親もいた。

「・・・・・・・」
「ルーク、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ。少し考え事してただけ」
「そう」
俺達はその後、無言で走り続けた。
俺の中では昔感じた怒りが渦巻いていた。

太陽も昇り始めだんだん明るくなってきた頃。
俺達はやっとのことで首都に辿り着いた。
長い道のりだった。一睡もしないで走り続けたぐらいだから。

「ルークありがとう。あなたのおかげで助かったわ」
「気にしないで。何度も言うようだけどこれが仕事だから」
「とにかく1度お城に来てくれる。お礼もしたいから」
「うん、まぁそれはいいけど」

実を言うとさっさと帰りたいがまだ報酬を貰ってないし。
お城という場所はあまりにも恐れ多いがしょうがないだろう。
貰えるものを貰ってさっさと家へ帰ろう。

「ここがアルレイン城よ」
「へぇ・・・。なんというかでかいね」
これは既にお金の使いすぎのレベルなんてもんじゃないと思うけど・・・。

俺はボロ小屋に住んでいるというのに、理不尽にもほどがある。

「ナターシャ様？ナターシャ様ですね」

突然、どこからか若い女性の声がした。

声の方向を向けるとメイドさんらしき人がこちらへ走ってきた。

「ナターシャ様、ご無事で良かった。本当に心配したんですよ」

「ごめんなさい、エレイン。突然の出来事だったから連絡も取れなくて」

「あなたがご無事なら構いません」

エレインと呼ばれた女性はそう言いながら俺に目を向けた。

なんだか胡散臭そうな人物を見るような目になっている。

失礼なやつだな。俺はナターシャの恩人だというのに。

「あ、紹介するね。彼は私を助けてくれたルークよ」

「そうなんですか。私はエレイン・ブラウンと申します」

「あ、ルークです」

「よろしくお願いしますね」

「はぁ、こちらこそ」

俺はお辞儀するエレインを見て慌てて真似をした。

やっぱりこういう場所は苦手だ。

「ナターシャ様、早く王様にお会いになってください。昨日からずっと心配なさってるのです」

「えぇ、分かってる。今から行くわ。エレイン、ルークをお願いしてもいいかしら」

「はい。客室の間へと案内しときます」

「ありがとう。じゃあ、私は行くわね」
「はい」
エレインの返事を聞くとナターシャは走って城内へと入っていった。
俺はまだ会ったばかりのエレインと2人きりにされてしまった。
なんか気まずいな・・・。

Ｃｈａｐｔｅｒ１－５：城内（前書き）

もしかしたら、今日はあと１話更新するかもしれません。

Chapter1－5：城内

「こちらが客室の間となっております」

エレインが案内してくれた場所はかなり大きい部屋だった。
俺の家かつ仕事場であるオンボロ小屋の3倍ほどの広さがある。
1つの家が1つの部屋の広さに負けるとは世の中理不尽だな。

「では、私は一旦失礼します。何かあったら部屋を出て近くを歩いている人に声をおかけください」
「あ、はい。分かりました」

俺の返事を聞くとエレインはお辞儀をして出て行った。
1人で広い部屋に残された俺は落ち着かず部屋の中を適当に歩いていた。
貧乏性というやつだろうか。妙にこういう場所は落ち着かない。
とりあえず、はやくナターシャが戻ってきてくれることを祈ろう。

1時間は待っている。
それなのに俺は依然と部屋に一人ぼっちだ。
なんとなく忘れられてるんじゃないかと心配になってくる。

「1度、この部屋出てみようか？でも迷子になったら・・・」

俺は多少の心配もあったが一応出てみることにした。

このままだと当分、この部屋に閉じ込められることになるからな。
俺は部屋の扉をあけそーっと外の様子を窺った。
別にこんなことする必要はないのだがやってしまう。
理由は知らない。

「俺、怪しい奴みたいだ・・・」

そう思いながらも俺は十分に怪しい移動の仕方で城を移動し始めた。
そして１０分後・・・。

「早くも迷子って訳か・・・」

一体、ここはどこなのだろうか？
俺が分かってることは室内って事だけだ。
上に屋根が見えるからなそれは間違いないわけだ。
それにしても、この広さは一体何なんだ・・・。
生活をしていくうえでこんなもの必要あるのか？
まったく金の無駄遣いもいいところだ。

「それにしても・・・。どうして誰とも出会わないんだよ」

１０分以上歩いてるし既に隠れるのはやめにしている。
それなのに未だに一人ぼっちってどうよ？
いじめられっ子みたいじゃないか。

「部屋から出るべきじゃなかったって訳か・・・」

とりあえず、そこらへんにある部屋で適当に休んでるか。
こんだけ部屋があれば、空き部屋なんてたくさんあるだろう。
よし、それに決定。ということで、この目の前の部屋にさっそく入

ろう。

ガチャ

鍵はかかっていなくドアは普通に開いてくれた。
ふかふかのソファがあるといいななんて思いながらドアを押した。

「あれ・・・？」

そこには予想外に人が居た。
しかも、俺がここに来ることになった原因の人が。
着替え中なのか上着に手をかけているところだった。
ナターシャは俺を見て固まっている。

「キャー」

ナターシャの叫び声が城内に響き渡る。
俺は逃げなきゃと思いながらその場から動くことが出来なかった。
だけど、頭だけはしっかりと動いていて俺は自分の命が危険に晒されていることを理解していた。

「死刑だ、死刑だ」

今、ひたすら死刑を連呼しているのはナターシャのお父様である。
つまりアルレイン国の王様ウィリアム・アルレインだ。
王様のくせに国民を簡単に死刑にしようとするとは・・・。
まぁ、自分の大切な娘の着替えを覗かれたんだからしょうがないか。

やったの俺だけど・・・。

「お父様、ルークはわざとじゃないのよ」
「そんなことは関係ない。覗いたことには変わりはない」
「でも、ルークは私の恩人よ」
「それを考慮しても死刑だ。あいつに生きる資格はない」
「駄目よ。それに、どんな罪状で死刑にする気なのよ」
「お前の着替えを覗いた。それだけで十分だ」
「駄目よ。とにかく、もう静かにしてよ」
「・・・・・・・。チッ」
「王様のくせに舌打ちしない」

なんか、これ見てるとあの人が王様でこの国大丈夫なのかと思ってしまう。
実際は国民にしっかりと信頼されてる人だけど。

「分かった。小僧、今回だけはナターシャに免じて許してやる」
「はぁ・・・。ありがとうございます」

小僧って何だよ。俺は18だから成人をしてることになってるんだよ。

「おいおい、何だその目は？文句でもあるのか」
「いえ、ありませんが」
「つまらん。口答えしてきたら死刑にしてやろうと思ったのに」

この人はどんだけ俺を殺したいんだよ。
もう、これからは心の中でこいつって呼んでやるよ。

「あの、これから俺はどうすればいいんでしょうか？」

とりあえず俺としては報酬を貰って帰りたいんだけど。

「帰れ。さっさと田舎に帰れ」

「それはいいんですけど。まだ報酬をもらってないので」

「報酬？娘の着替えを見といてなんだそれは？」

「え、でも、あれはわざとではありませんし」

「関係ない。お前にやる物なんて何もないわ」

この野朗、お前が王様じゃなきゃ今すぐ殴ってるのに。

「でも、報酬がないと色々困るんですが・・・」

こっちは餓死寸前なんだよ。

良く考えたら3日何も口にしてねぇし。

よくここまで護衛できたと自分で自分を褒めてもいいぐらいだ。

「ははは。金がないのか？そこら辺で餓死でもしとくんだな」

「・・・・・・・・・」

こいつは本当に王様なのか？

愛すべき国民に向かって餓死しろだって。

そろそろ俺の堪忍袋の緒も切れるってもんだぜ。

切れないけど。

「お父様、ルークに意地悪はやめて」

「お前、まさかあんな変態野朗の見方をするんじゃないだろうな」

「ルーク、報酬はあとで渡すから」

「駄目だ、そんなの絶対に渡すな。こいつは餓死させるんだ」

「あとで、もう1度私の部屋に来てくれる」

「ナターシャ、お前は何を言ってるんだ。こんな変態を部屋に連れて行くなんて」
「そこで、ちゃんと報酬は渡すから」
「おい、ナターシャ。聞いてるのか？」

かわいそうなことに王様しかとされてるよ。
まぁ、いい気味だ。俺を餓死させようとした罰だ。

Ｃｈａｐｔｅｒ１－５：城内（後書き）

もしかしたら、今日はあと１話更新するかもしれません。

Ｃｈａｐｔｅｒ１－６：魔法石

コンコン

ナターシャの部屋のドアをノックする。
さっき、わざとではないといえ覗いてしまった為、微妙に緊張する。
さっきから殺気篭った視線を感じるし。

ガチャ

そんな音がして内側からドアが開き目の前にナターシャが立っていた。
さっきの着替えのシーンを思い出し顔が微妙に赤くなってしまう。
やばい・・・。ナターシャにまで変態扱いされたら俺は終わってしまう。
さっきの事件で王様以外の人からも軽蔑するような目で見られてるというのに。

「どうかしたの？ルーク、顔が赤いけど」

やっぱり、気付かれたか・・・。
とにかく俺の命のためにしっかり言い訳しないとな。

「疲れてるだけだよ。昨日から一睡もしてないしさ」
「そういえばそうね。何だか私も急に眠くなってきた感じがするわ」

ふぅ。なんとかばれずに済んだ。
さっさと貰うべきものを貰って帰ろう。

「ルーク、じゃあ入って」
「あ、うん」

う～ん。俺としてはここで貰っておさらばが良かったのだけど。
まぁ、しょうがないか。
それにしても王様の野朗の視線がうざったい。
部屋に入ってドアを閉めて、遮ってやろう。
俺はそう考えながら部屋の中に入り思惑通りドアを閉めてやった。
あの野朗の苦しむ顔が目に浮かぶぜ。

「広いな・・・」

俺は部屋を見回して思わずそう呟いた。
さっきの客室の間もそうだったけどこの部屋も広い。
なんというか身分の違いを感じてしまう。

「はい、まずこれは仕事の報酬よ。２００００グランあるわ」
「２００００グラン・・・。そんなに貰っていいの？」
「えぇ、あなたは命の恩人だから」

２００００グランっていったら当分は働かずとも暮らせるぞ。
やっぱり王族はスケールが違うんだ・・・。
これで貧困生活からもさよならだ。
とうとう俺にも運が回ってきたみたいだ。

「それから、これは個人的なお礼」
「これって魔法石だよね？」
「そうよ。多分、あなたの役に立つと思うわ」
「へぇ、なんて魔法なの？」
「秘密の部屋（シークレット・ルーム）よ。中級魔法だけどあなたなら大丈夫よ」

「ナターシャは覚えてるの？」
「いいえ。私にはまだ力が足りないの」
「そうなんだ。でも、俺にも使えるか分からないけど」
「大丈夫よ」
「そうかな？じゃあさっそく使ってみる」

俺はそう言ってナターシャから魔法石を受け取った。
それは左手で持ち石に右をかざした。
その瞬間、右手から体全体にわたって神秘的な力が流れていくのを感じる。
どうやら、俺はこの魔法を使いこなせる力があるようだ。
中級魔法が使える力があるとはなかなか嬉しいことだ。

「ふぅ。なんとか出来たみたいだ」
「良かったわね。上手く役立ててね」
「あぁ、ありがとう」
「いいのよ。それよりルーク今日はどうするの？」
「どうするのって？」
「すぐに帰っちゃうの？それとも泊まっていくの？」
「すぐに帰るつもりだけど」

こんなところに止まれるはずがない。
確実に王様の野朗に寝込みを襲われてあの世行きだ。

「そう・・・」

なんだか悲しそうな雰囲気だな。
俺ごときとの別れを悲しんでもらえるのは嬉しいけど命が大事だしね。

「泊まったら？」

「あぁ」

あれ、なんか肯定の返事しちまった・・・。

てっきり、別れの挨拶がくると思ってたんだけど・・・。

死んだかも・・・。

Chapter1－7：提案

「変態野朗を泊めるだと。ナターシャ、何を考えてるんだ？さてはあいつに弱みを握られたか？」

王様が怒り狂ったようなそう言っている。

そんなに俺のことが嫌いなのか？

まぁ、嫌いだからこんな風になってるんだけど。

「違うわ。ルークは昨日から一睡もしてないのよ。このまま帰したら酷よ」

「関係ない。生きてるだけましってもんだ。とにかく許さん」

「嫌よ。もう、決めたの」

「・・・・。ナターシャ、もしかしてお前、あいつにほれ、グハッ」

王様が何か言ってる途中にナターシャの拳が王様の腹に突き刺さった。

なかなかに痛そうだ。ご愁傷様。

「変なこと言ってないで、ちゃんと仕事しなさい」

それだけ言い残すとナターシャは部屋を出て行った。

う～ん。俺も一緒に連れて行って欲しいのだが・・・。

だって今、この部屋には俺と俺を軽蔑してる人しかいないし・・・。

なんか皆の視線が痛い・・・。

「おい、糞野朗。本当に泊まっていくつもりではないだろうな？」

とうとう排泄物扱いになってしまったか。

同じ身分であったならいろいろ言い返したいが残念ながらそうではない。

「いや～、どうしましょうかね？」
「どうしようだと？そこは普通だったら帰りますだろ？」
「そうなんですか？」

これが俺の出来るせめてもの抵抗だ。とにかく惚けまくろう。
ダサいけど相手は仮にも王様だからな。

「面白い小僧だ。天国へ行きたいのか？いや、地獄の間違いか」
「まだ死ぬつもりはありませんよ」
「小僧。人生というものはな、いつ何が起こるか分からないのだよ」
「はぁ」

いきなり悟ったようなこと言ってるよ・・・。
とうとう頭逝っちまったか？

「お前に向かってここで魔法を放ってもいいんだぞ」

この野朗、目が本気だ。
ここは抵抗したら死ぬ。素直に謝ろう。

「すいません。悪ふざけが過ぎました」
「分かればいいんだ。で、帰るのか？帰らないのか？」

帰りたいに決まってんだろ。
でも、どんな形であれ嘘はつきたくないしな・・・。

「一応、今日だけは泊まらせていただこうかと」

「・・・・・・」
「実はまる1日眠ってないんですよ」
「・・・・・・」

無言やめてほしいな。恐いから。

「それに3日も何も口にしてないんですよ。このまま帰ったら途中で倒れちゃいますし」
「城に泊まってもお前にやるものなど何もないぞ」

ナターシャから何か貰うからいいんだよ。

「ナターシャに期待しても無駄だ。お前は私が直々に見張ってやる」

俺ってそんなに悪い事したっけ？
そりゃあ着替えは覗いたけどさ・・・。
そんな最悪の在任扱いしなくてもいいでしょ・・・。
もう、帰ろうかな・・・。

「王様」

突然、今まで黙って見守っていた観衆の1人がそう言った。
声の方向に顔を向けると２０半ばぐらいに見える男性が立っていた。
なんか、強そうだな。

「彼に試験を与えてみてはどうでしょう？」
「試験だと？それはどんなものだ？」
「私と戦って勝てばこの城に泊まる権利を与えましょう」
「ほぅ。それはいい考えだ」

どうやら俺の意見は通りそうにないな。
絶対に戦う事になるな・・・。
お腹すいた・・・。

「では決まりでよろしいでしょうか？」
「勿論だ。すぐに始めても大丈夫か？」
「勿論です」
「よし、では始めよう」

俺には聞かないのかよ。

「おい、糞野朗。訓練場に移動するぞ」
「どこですか、そこ？」
「黙ってついて来い。嫌なら帰ってもいいんだぞ、腰抜け」
「はぁ、どうしようかな・・・」
「逃げないで下さいよ。私はあなたと戦ってみたい」
「はぁ・・・」

めんどくさい・・・。すぐ負けて帰ることにするか。
ナターシャには悪いけど王様に嫌われすぎたみたいだし。

訓練場。そう呼ばれる部屋もやはり広かった。
この部屋で一度３００人ぐらいが一斉に修行できそうだ。
本当に必要な広さなのか疑問になる。

「では、始めよう。審判は私が直々に担当しよう」

「恐れ入ります、王様」

そう言ってまだ名も知らぬ男性は王様に向かって頭を下げた。
一応、俺も下げておく。なんて屈辱感だ・・・。

「では、これからアルス・レイブンと糞野朗の試合を始める」

へぇ、アルスっていう名前なんだ。
まあ、知ったところで何の意味も持たないけどね。
っていうか、俺はこんな時まで排泄物扱いかよ・・・。

「始め」

王様の野朗の言葉を合図にアルスは動き始めた。
俺は空腹を感じながらも重い足をなんとか動かした。
勝てる気どころか、戦える気すらしない・・・。
どうなるかな、俺・・・。

Chapter1－8：疑い

「白い炎（ホワイトフレア）」

俺より3倍の速さで動いているアルスが魔法を放った。
俺はそれを避けようと右に動いたが体がついてこなかった。

「くっ・・・」

あれ？くらったけど別にそこまできつくない。
炎のくせに熱さも余り感じないし、これなら動ける。
とにかく、距離を詰めて攻撃しよう。

「あれ？」

俺は勢い良く動き出そうとしたがさっきよりも体はついてこなかった。
空腹とか疲れとかの問題じゃないぐらいに体が重い。

「どうですか？これが白い炎（ホワイトフレア）の力。」
「身体能力を下げる技って事か」
「そういうことです」
「ちっ」

お腹がすいてなきゃ余裕で避けられたのに。
それにしても、厄介な技だ。
これじゃ、他の攻撃も避けられない。

「降参しますか？もう結果は見えていますよ」

「・・・・・」

降参しても構わないがなんだか悔しい。

こういう闘いじゃほとんど負けたことがないのに。

「アルスよ。はやく止めをさすんだ。このさい命をうばってしまってもよいぞ」

あの糞王。いちいち変なこと言うんじゃねぇよ。

「さぁ、どうします？あと3秒だけ待ちますよ」

「3秒もいらねぇよ。生憎、逃げたりするのは好きじゃないから」

嘘だけど。

「そうですか。それでは、いかせて貰います。後悔しないでくださいね」

「お前こそ後悔するなよ」

「面白い事を言うんですね。それなら、上級魔法で相手をしましょう」

「・・・・・・。え？」

「待ったなんてなしですよ。もう止めるつもりはないですから」

上級魔法って。そんなのありかよ。

こんな所で使うなよ。本気で俺を殺す気じゃん。

っていうか、何で使えるんだよ。

「裁きの雷（ジャッジメント・サンダー）」

言葉と共に俺の真上から俺めがけて大きな雷が落ちてきた。

魔法をかけられてほとんど動けない俺には避けるのは無理だ。
俺は半ば命すらも諦めて目を閉じた。
その瞬間、激しい音が訓練場全体に響き渡った。
でも、俺の体自体には何の痛みもなかった。

「あれ、はずれたのか？」

俺はそんな事を呟きながら恐る恐る目を開いてみた。
俺の足元の床は落ちた雷のせいで大きな穴が開いている。
穴の周りはもう元がなんだったのか分からないぐらい焦げている。
なんていうか、命拾いしたみたい。

「わざと外しました。狙ったら死んじゃいますから」

そんなの最初から使うなよ・・・。

「でも、これで分かったんじゃないですか？」
「え？」
「私と君の実力の差のことです」
「・・・・・」
「私はこれでもアルレイン四聖の1人ですから」

アルレイン四聖・・・。
どうりで、こんなに強い魔法を使えるわけか。
俺みたいな田舎者でもその言葉は聞いたことあるからな。

「で、結局は自慢がしたいだけなの？」
「いえ、そういう訳ではありません。ただ、私はあなたに早めにこの城を去ってもらいたいのです」
「・・・・・・・」

こいつも王様同様に俺を嫌ってるわけね。

「言っておきますが、あなたが嫌いだとかそういう訳ではありません」

「・・・・・」

「私はあなたを疑っているのです」

「え？俺を疑ってる？」

「はい。私はあなたがナターシャ様を襲った一味と関係があるのではないかと思っています」

「何言ってるんだ。俺はナターシャをここまで送り届けたんだぞ」

「ここへ侵入する為にナターシャ様を助けてのかもしれません」

「でも、俺はたまたま逃げてきたナターシャの依頼を受けただけだ」

「本当にたまたまなのでしょうか？」

「え？」

「調査の結果ではあなたが1人で営んでいるなんでも屋は始めて2ヶ月らしいですね」

「それが、どうかしたのか？」

「実はシナリオだったんじゃないでしょうか？」

「シナリオ。何、訳の分からない事を言ってるんだ？」

「お嬢様を誘拐しわざと逃げ出せるようにし、逃げ出したら誘導するかのようにあなたの店へ導きあなたがお嬢様を助ける」

「俺は相手の一味とも戦ったんだぞ」

「それは演技にすぎないのでは？敵がまったく追ってこないというのもおかしな話ですし」

「あんた、本気でそう思ってるのかよ」

「本気でないとこんないい加減なことは言いませんよ」

「仮に俺が敵だとして侵入して何の利益があるんだよ？」

「そんなの分かりませんよ。なぜなら、利益になしそうなことはたくさんあるのですから」

「・・・・・・・・・」
「だから、私は一刻も早くあなたにこの場所を去っていただきたい」
「・・・・・・・・。あんた、ナターシャを誘拐したのが誰だか分かってるのか？」
「勿論です。ヴィシュラート一族です」
「俺の両親はヴィシュラートの乱で犠牲になったんだ。そんな俺がどうしてあいつらの仲間になるんだ？」
「人間、何があるかなんて分かりません。両親を殺されたからというのは証拠にはなりません」
「・・・・・・・・。分かったよ」
「分かってくれましたか」
「あぁ、あんたの望み通りここを出て行くよ。居たくもないしな」

俺はそう言うと、訓練場の入り口へ向かって歩き始めた。
帰ることになったら聞こえてくるだろうと思った王様の罵声も今はなかった。
それほどに、この場の空気は重いのだろう・・・・。
こんなところ来るべきじゃなかった・・・・。

Chapter1－9：嘘

訓練場を出て俺は城の中を通っていた。
心の中では怒りが渦巻いていた。
俺はあの時、生まれて始めて人を殺したいと思った。
それほどに、アルスの発言は許せなかった。

「ルーク？」

廊下を歩いていると後ろから声がかかった。
昨日出合ったばかりなのに聞き慣れた感じがする声だった。
俺は後ろを振り向き声の主に顔を向けた。

「ナターシャ」
「ルークどうしたの？凄い怒ってる顔してる」
「いや、なんでもないよ。それより何してるの？」
「部屋から出たら皆が居なくなってたから、探してたの」
「そうなんだ。皆は訓練場とかいう場所にいるよ」
「そう。ルーク、あなたはどこへ行くの？」
「トイレだよ。すぐに俺も戻るから先に行ってたら？」
「分かったわ。トイレの場所は分かる？」
「あぁ。ちゃんと分かるよ」
「そう。じゃあ、また後でね」
「うん、また後で」

俺の返事を聞くとナターシャは訓練場へと歩いていった。
俺は城の出口へと向かって再び歩き始めた。
相変わらず広くて出口までは大分時間がかかったが辿り着けた。
俺はそのまま振り向きもせず城をあとにした。

「ナターシャごめん。嘘ついて・・・」

門をくぐる時、俺はそう呟いた。

家に着いた時はまた夜が明けて朝になっていた。
つまり、俺は2日まるまる眠らないで過ごしている。
食べる事に至っては丸4日、遠ざかっている。
でも、なぜか空腹も眠気もまったく感じなかった。
感じるのは異常なまでの怒りだった。

「畜生・・・」

一体、俺が何をしたっていうんだ?
俺はナターシャを助けたんだ。
それを、どうしてあんな風に疑われなきゃならないんだ。
仕事上、俺を疑うのはしょうがない事かもしれない。
でも、あいつの言い方は許せない。

「両親を殺されたからというのは証拠になりません」

アルスの言った言葉が脳裏に浮かび上がる。
抑えきれないほどの怒りにさらに拍車がかかる。

「畜生・・・。畜生・・・」

俺は部屋の中で長い間、そう呟いた。

Ｃｈａｐｔｅｒ１－９：嘘（後書き）

第１章がやっと終わります。

次からは第２章の始まりです。

予想では第１章の倍の長さになりそうな気がします。

あくまでも予想ですが・・・。

とにかく、よろしくお願いします♪

Chapter2－1：依頼

ナターシャの護衛の依頼から帰ってきて3週間が経った。
相変わらず仕事はこないが、大金のおかげで生活できている。
だけど、そのお金を使うたびにアルレイン城での出来事を思い出す。
そしてその度に、自分の中で怒りが渦巻くのを感じていた。

「それにしても暇だ・・・」

金が結構あるとはいえ、ずっとあるわけではない。
それに少しぐらい貯金もしてみたい。
そんな訳で、俺は仕事が早くこないかなと期待して過ごしている。

「ったく。どうして客がこないんだよ・・・」

店の前に自作の大きい看板も出してあるというのに・・・。
似たような店が近くにあるわけでもない。
もっと大きな宣伝が必要なのか？
街歩いて、大声で自分の店のアピールするとか？
恥ずかしいから却下だな。

「はぁ・・・。仕事するのがこんなに難しいとはね」

コンコン

「あぁ・・・。なんかまた幻聴が聞こえてるよ」

コンコン

「・・・・・・。これは前と同じ展開」

自然に出来てしまう笑みをなんとか堪えながら俺は玄関へと向かう。
久しぶりの客だ。二回目のノックの音が聞こえたら幻聴じゃないはず。

ガチャ

そんな音をたてドアが開く。
それと同時に今回の依頼人であろう人が目の前に立っていた。
年齢は３０ぐらい。性別は男性。見た目で分かるのはそれだけだ。

「ここがなんでも屋だと伺ったのですが」
「あ、はい。そうです。えっと、お入り下さい」
「ありがとうございます」

お礼を言うと男性客はゆっくりとした足取りで中へ入ってきた。

「あちらへお座り下さい」

俺はそう言ってソファに指差した。
そして、俺はいつも通りテーブルを挟んで反対側に腰掛けた。

「えっと、お名前の方は？」
「ステア・フレイビアと申します」
「ステアさんですか。俺はルーク・レイフッドと申します」

「ルークさんですね」
「はい。それで、依頼の方は？」
「えぇ。魔法石を取ってきてもらいたいのです」
「魔法石ですか？」
「えぇ。アルレインの首都から南西に２０ｋｍほど行ったところにある竜の祠を知っていますか？」
「名前だけは聞いた事があります」
「そこの奥深くにあるといわれる魔法石を取ってきてほしいのです」
「でも、そういうものってもう既に取られてるものではないのでしょうか」
「いえ、それはありません。その魔法石は竜によって守られているのです」
「え？今、竜っって言いましたか？」
「はい。竜がその魔法石を守っているのです」
「つまり、手に入れるには竜を倒さなければいけないと」
「そういうことになりますね」
「・・・・・・」
「報酬は２００００００グラン用意いたします」

２００００００グラン・・・。
ナターシャの時の依頼の１０倍の金額じゃないか。
拒否しようと思ったけどその考えを拒否だ。
でも、待てよ・・・。

「そんなに出せるなら、どうして俺に頼むんですか？」
「それは、どういう意味ですか？」
「それだけの大金を支払えるならもっと一流の場所に頼む事も出来るでしょう」
「それには、また別の理由があるのです」
「その理由を聞かせてもらうことは出来ますか」

「いえ、それは出来ません」
「そうですか」
「すいません。依頼は別に断っても構いません」

・・・・・。どうしよう？
一流の場所に頼めない理由っていうのがどうしても引っかかる。
でも、仕事を探していたしあの大金は捨てがたい。
それに、もしかしたら向こうへ行けば理由っていうのが分かるかもしれない。

「分かりました。その依頼受けましょう」
「ありがとうございます」
「期限はありますでしょうか？」
「いいえ。難しい仕事なので特に期限はありません」
「そうですか、分かりました。それでは連絡先を教えてもらえますか」

連絡先を知っておかないと手に入れたとき、渡せないしね。

「それは断っておきます」
「え？でも、それじゃあ手に入れても」
「大丈夫です。私はこれから1週間に1度、この場所を訪れます。その時に渡してもらえればいいので」
「そうですか・・・。分かりました」

変な感じはするけど依頼人の言うことにあまりケチはつけられない。
とにかく、仕事を成功される事を考える事にしよう。

「それでは、私はこれで」

ステアはそう言うと立ち上がり玄関の方へ向かって歩き出した。
俺はその後ろについて歩き、出て行くところまで見送った。
その後は、自分が座っていた場所に座って大きく伸びをした。

「よし、久しぶりの仕事だし張り切っていくか」

自分に言い聞かせるようにそう言って、俺は立ち上がった。

Ｃｈａｐｔｅｒ２－１：依頼（後書き）

第２章突入しました。

昨日の後書きでも予告しましたがおそらく長くなります。

気長に読んでもらえると嬉しい限りです。

それでは、これからもよろしくお願いします。

Chapter2－2：変人

依頼を受けて丸一日が経った。
長い時間をかけてやった準備はいつもと何も変わらない。
今回はいつもと違ってお金があるくらいだ。

「剣は秘密の部屋（シークレット・ルーム）に入ってるし特に持ち物はないか」

そんなことを呟き最終確認を終えた俺は出発する事にした。
仕事場かつ家であるボロ小屋を出て俺は竜の祠へと歩み始めた。

「確か首都から南西に２０ｋｍとか言ってたよなぁ」

首都に近いならそこら辺で最終的な準備も可能なんだけど・・・。
城の誰かに見つかったら面倒くさいことが起きるかもしれないよな。
どうするべきか？首都で寄り道するかしないか。
ナターシャに会いたいってのもあるしなぁ。
まだ、嘘ついて出て行ったこと謝ってないし・・・。
まぁ、あっちが気にしてるかどうかなんし分かることではないけど。
とりあえずアルスにだけは会うわけにはいかない。

「やっと、半分ぐらいか。もう暗いしここら辺で休もうかな」

前回は敵に襲われたから急がないといけないけど今回は時間がたっぷりある。

休みながら首都の事はどうするか考えようかな。

夜が明けた。
結局、考える前に眠りについてしまった。
まぁ、眠るのって幸せな事だししょうがないか。

「神速（ラピッドリー）」

魔法を自分にかけて首都まで残り半分となった道を走る。
ぐっすり眠った分、走るスピードは快調だ。

ガサッ

突然、そんな音が聞こえた。
俺は走っていた足を止め周りを見渡した。
特に殺気や敵意みたいなものは感じないけど誰かがいるのは間違いないようだ。

「誰か居るの？」

音が聞こえた方から若い男の声が聞こえる。
どうやら相手は俺の事を警戒していないようだ。
一応、俺は警戒を解かないままでいると1人の男が現れた。

「やっぱりいたんだ。返事してくれたらいいのに」
「お前がどんな奴か分かんないし」

「それもそうだね。でも、安心して君を襲ったりはしないから」
「分かった」
「ありがとう。それで君はこんな所で何してるの？」
「ちょっと仕事があってさ。今は首都に向かってる」
「へぇ。僕も今、首都に向かってるんだ」
「そうなんだ」
「うん。ここで会ったのもさ何かの縁だし一緒に行こうよ」
「でも、何者かも分からない人と行動ってのはちょっと気が退けるけど」
「大丈夫。さっきもいったけど僕は君の敵ではないから」
「・・・・・・」

どうしたものか？移動するのに足手まといにならなければいいんだけど。

「悩んでるみたいだね」
「多少は・・・」
「う～ん。じゃあ、とりあえず自己紹介といこうよ」
「自己紹介？」
「うん。じゃあ僕から。名前はシェイン・ループル」
「ループル？それってもしかして超がつくお金持ち貴族の？」
「なんか嫌な言い方だね。一応それであたり」

まさか、また身分の違う人間に出会うとは。
ルーブル家と言ったらアルレイン家と最も結びつきの強い貴族だったはずだ。

「へぇ、俺はルーク・レイフッド」
「よろしくね、ルーク」
「あぁ、よろしく」

「それで、ルークはどうして首都に向かってたの？」
「さっきも言ったけど。近くで仕事があるからその前に寄るだけ」
「そういえば言ってたね。僕が何しに行くか聞きたい？」
「別に聞きたいとは思わないけど」

どうせ、アルレイン城に行くだけだろ。
分かりきってる事をわざわざ聞きたくないけど・・・。

「いいよ、話すよ」
「・・・・・・。どうぞ」
「うん。ナターシャに会いに行くんだ」
「へぇ。王女様に会いに行くんだ」
「まぁね」
「でも、わざわざ会いに行かなくたって嫌でも会う日とかあるんじゃないの？」
「それはあるけど、それだけじゃ足りないんだ」
「足りない？何が足りないんだ？」
「ナターシャに会うことだよ。本当は毎日でも一緒にいたいぐらいだし」

つまり。こいつはナターシャのことが好きなんだな。
っていうか、何でそんなことを初対面の俺に教えるんだよ。
恋愛話ってはあんまり興味がないんだけどな・・・。
一応、話をあわせておくべきか・・・。

「王女様の事が好きなの？」
「うん」

なんともまぁ、真っ直ぐな奴なんだ。
俺には真似できないな。さすがお金持ちは考える事が違う。

「へぇ。結婚できるといいな」
「結婚は決まってるよ」
え？2人ともまだやっと成人したぐらいだろ？
もう結婚するのかよ・・・。やっぱり金持ちは違うんだな。

「早いな。それならさっさと結婚して一緒に暮らせばいいのに」
「するのはまだ先だよ。許婚だから決まってるだけのことだから」
「許婚ねぇ。それって本当にあったんだな」
「一応ね。王家や貴族の間でしかないと思うけど」
「へぇ。でも、許婚の相手を好きになれるって凄いな」
「え、何で？」
「俺のイメージでは許婚って嫌々結婚する方が多い感じがするから」
「どうなんだろうね？でも、確かにナターシャはあまり僕との結婚は乗り気じゃなさそうだな」
「・・・・・。何て言っていいか分からないけど頑張れ」
「うん。ルークはいい人だね」

俺がいい人なのかは分からないからほっといて気になってた質問をしようかな。

「それで、どうして初対面の俺にそんな事を話したんだ？」
「え？なんとなく話したかっただけだよ」
「そっか」

シェインは意外と変人のようだ。

Chapter2－3：連行

「ふぅ、やっと着いたねぇ」

首都に着きシェインが開口一番そう言った。
俺は適当に相槌を打ち周りを見渡した。
アルレイン家に関係ある人が近くにいないか探しているのだ。
といっても、俺がそうだと認識できる人は少ないが。

「ねぇ、ルークはこれからどうするの？」
「今日はもう遅いからどこかに宿を取ってそこで休憩かな」
「そっかぁ」
「あぁ。シェインはどうするんだ？」

俺は何気なくそう尋ねた。
この発言が自分を地獄へと導く事を知らずに・・・。

「僕はこのままアルレイン城へ向かうよ。あ、そうだ」
「どうかした？」
「うん。いいこと思いついたんだよ」
「いいこと？」
「うん。ルークも僕と一緒にアルレイン城においでよ」
「はぁ？」

何を言ってるんだ、こいつは。
今、俺が行きたくない場所ぶっちぎり1位の場所に誘うなんて。

「やめとく。俺、ああいう場所嫌いだから」

どうだ？この完璧な断り方ならきっと大丈夫だ。
普通の人間なら嫌な事を無理矢理、させないだろう。

「えぇ、でも僕、もっとルークと話したりしたいけど」
「そういわれてもな」

お前と話してもナターシャの事ばかりだろ・・・。

「う～ん。それなら僕が宿に泊まろうかな」
「あぁ、それなら別に構わないけど」
「そっか。それならそうしよう。じゃあ、さっそく宿探ししよう」

１０分後・・・。

「不運だね。こんな時に限って宿屋に空いてる部屋がないなんて」

不運なんてもんじゃねぇよ。
もう、嫌がらせにしか思えない・・・。

「じゃあ、やっぱりアルレイン城に泊まるしかないね」
「それはやめとく。俺は今日も野宿するから」
「えぇ。僕は野宿なんかしたくないよ」
「シェインはアルレイン城に行けばいいだろ。ここでお別れってこと」
「・・・・・・。駄目」
「はぁ？」
「駄目。ルークも連れて行く」
「嫌って言ってるだろ。俺は王家に行きたくないんだよ」
「えぇ。でも、僕ルークともっと話したいけど」
「それはさっきも聞いたよ」

「それにさ、ナターシャにも会ってもらいたいんだ」
「はぁ？なんで王女様に会うんだよ？」
「僕やナターシャはさ、同じ年代の友達が少ないんだ」
「あぁ、それで？」
「だから、ルークもナターシャの友達になってあげてよ」
「無理無理。俺の場合は身分が違いすぎて友達じゃなくて下僕になる」
「大丈夫だよ。ナターシャはそんな風に人を見ないから。それにルークは僕の友達だし」

なんか、だんだん何を言っても無駄な感じがしてきた。
でも、抵抗をやめたら地獄が待っている。

「とにかく俺は嫌だから。シェインには悪いけど」
「・・・・・。体縛（ボディーバインド）」

あれ？なんだか体がまったくもって動こうとしない。
もしかしてなくても魔法にかけられたみたいだ。

「ごめんね、ルーク。少しの間だけど我慢してね」
「・・・・・」

声を出そうとしても何も言えない。口が動こうとしない。

「浮遊（フロウティング）」

シェインが魔法を唱えると突然、俺の動かない体が宙に浮いた。
どうやら、これで俺が城へ行くのは決まったようだ。

「本当にごめんね、ルーク」

歩きながらシェインが俺の方を向いて言った。
その顔は笑顔だ。どうやら、ちっとも悪いとは思っていないようだ。
こっちは最悪な事態が待っているというのに・・・。

Chapter2－4：頼み

シェインの魔法で浮かびながら俺は抵抗も出来ず城へと近付いていた。
少しすると城の門が近付いてきたのがほんの少し見えた。

「もう少しで降ろすから、待っててねルーク」
「・・・・・」

今すぐ降ろしてくれ・・・。
なんか、もう泣きたくなるんだけど・・・。

「あ、シェイン様お久しぶりです」

城の門に通りかかった時にそんな声が聞こえた。
確か、声はエレインだった気がする。
いきなり城の人間に遭遇かよ。
遭遇しない可能性なんてないとは分かっていたけど。

「久しぶりだねエレイン」
「はい。それより、この浮いているものは・・・」

エレインが途中で話すのをやめた。
どうやら、浮いているものが俺だと分かったようだ。
驚くのも無理はないか・・・。

「あれ、どうしたの？そんなに驚いた顔して」
「いえ、その、浮いている方がその・・・」
「え？エレインはルークの事を知ってるの？」

「あ、はい。というより、この城でルークさんの事を知らない人はいません」
「へぇ。ルークって有名人なんだ」
この城では有名人といえば有名人だ。
っていうか、さっさとこの魔法を解けよ。
「あ、そうだ。ルークそろそろ解いてあげるね」
俺の祈りが通じたのかシェインは浮遊（フロウティング）を解いてくれた。
これで自由だと思った途端、俺は背中から地面に落ちてしまった。
ったく、一旦降ろしてから解けよ・・・。

「ごめん、ルーク。降ろすのからするべきだったね」
「別にいいよ。それより、俺はもうどっか行くからな」
「えぇ。せっかくここまで着たのに。僕の苦労が水の泡じゃないか」
「シェインが勝手に連れてきたんだろ。俺はここに居たくないんだよ」
「僕は居てほしいけど」
「嫌だ。とにかく俺はここにだけは居たくない。いっそ死んだほうがましだ」
「そんなに嫌なんだ。もしかして、ここで何かあったの？」
「まぁ、そんなとこ。だから、俺はここで名前を知られてるんだよ」
「へぇ。それなら尚更行こうよ。ルークに会いたがってる人もきっといるよ」
「嫌だ。それで俺に会いたい人なんて居ないよ」
「あの、ルークさん」
俺とシェインの終わりそうにない言い争いにエレインが口を挟んだ。

「何？」
「私からもお願いです。城へ来てもらえないでしょうか？」
「嫌だ。あんたは知ってるだろ、俺がここに居たくない理由を」
「えぇ。しかし、どうしても会って貰いたい人がいるんです」
「会って貰いたい人？」
「えぇ、ナターシャ様です」
「ナターシャに？今更、俺が会えるわけない」
「お願いです。あの日からナターシャ様は元気がなくて」
「・・・・・・・」
「だから、どうかお願いします」
「ルーク、僕からもお願い。一晩でいいから城に泊まってよ」

2人からこんなに熱心に誘われると断りにくい。
でも、ここで承諾して俺を何が待っているというんだ？
冷たい目の可能性が高い。どんなに良くても王様の罵声は確実だ。
確かにナターシャには会いたい。会って謝りたい。
でも・・・。

「・・・・・。分かった。絶対に一晩だけだから」
「本当ですか？ありがとうございます」
「ルークありがとう。気に入ったら一晩どころか何日でも泊まっていいから」

泊まらねぇよ・・・。そもそもお前の家じゃないだろうが・・・。

「その代わり1つだけ条件がある」
「何でしょうか？」
「アルスを絶対に俺に近づけるな。あいつにだけは絶対に会いたくない」
「分かりました」

まぁ、これでなんとかなるだろう。
アルスにさえ会わなければ特に問題という問題はない気がする。
王様も問題といえば問題だけど罵声など可愛いものだ。

「それでは、ルークさん。ナターシャ様の部屋にご案内します」
「分かった。シェインはどうするの？」
「僕は最初に王様に会いに行くよ。だから先に行ってて」
「分かった。じゃあ、また後で」
「うん」

本当はシェインも居てくれた方が心強かったがしょうがない。

「それでは、行きましょう」
「あぁ」

俺はそう返事すると自分の鼓動がいつもより早くなっていることに気付いた。
俺は急な再会にどうやら動揺を隠し切れないようだ。

Chapter2－5：再会

城の中をエレインの後に続き、歩いていると、ほとんどの人間が俺を見て驚いていた。
ったく、俺は見世物ではないというのに・・・。

「エレイン、俺やっぱり帰っていいかな？」
「駄目です。ナターシャ様に会ってもらいます」
「だよね・・・。はぁ・・・」
「皆の視線が気になるのですか？」
「そんなところ」
「心を無にすればいいんですよ」
「なるほど」

出来たらやってる・・・。

「到着しましたよ。心の準備は出来ていますか？」
「出来てないって言ったら帰れるの？」
「ルークさんは拷問か何かを望んでいるのですか？」
「ごめんなさい」

なんか、いきなり怖くなってるんだけど・・・。

「それで、心の準備の方はよろしいでしょうか？」
「あ、うん。一応、大丈夫」
「分かりました」

そう言うと、エレインはナターシャの部屋のドアをノックする。
ノックから3秒ほどして小さな声が帰ってきた。

「何ですか？」
「ナターシャ様。エレインですがお客様をお連れしました」
「お客様？そんな話は聞いてないわ」
「突然の訪問だったためお伝えする事ができませんでした」

別に訪問したわけじゃないけど・・・。
あれって誘拐とよんだ方が正しい気がするし。

「今は誰にも会いたくないわ」
「そんなこと言わずに、一目見るだけでもいいので」
「・・・。着替えるから少し待ってもらえる？」
「分かりました」

ナターシャに対してそう返事するとエレインは俺のほうを向いた。
そして、小さい声で俺に話しかけた。

「ルークさんと別れてから3週間、この調子です」
「あんまり信じられないな。俺みたいな奴と別れたぐらいでそんな風になるなんて」
「実際なっているのです。でも、これで元に戻ってくれるでしょう」
「そうかなぁ？」
「そうです。ナターシャ様はルークさんの事をとても気に入られてますから」
「そうなんだ」
「えぇ、とても気に入られてます」

なんか、さっきから「とても」って所を強調してる気がするけど・・・。
きっと気のせいだよな。

「今、開けるわ」

突然、ドアの反対側からそんな声が聞こえた。
どうやら、ナターシャの準備が終わったようだ。

ガチャ

そんな音がしてドアが開く。
ドアを挟んで反対側には3週間前より大分やつれたナターシャがいた。
ナターシャは最初、元気のない顔をしていたが俺に気付くと驚いた顔になりそれから目に涙を浮かべた。

「ルーク」

ナターシャは俺の名前を呼ぶと俺の胸に飛び込んできた。
俺は突然の出来事で何も出来ずただ驚いていた。

「ルーク、ルーク・・・」

俺の胸の中でナターシャは何度も俺の名前を呼んでいた。
俺は恥ずかしかったけど、止めることも出来ずその言葉を聞いていた。

「ナターシャ様、ルークさんもお困りです。1度話したらどうでしょうか？」

3分ほどそのままだっただろうか。
ずっと側にいたエレインがそう提案してくれた。
少しばかり遅いが、触れないでおこう。

「分かったわ。ごめんなさい、ルーク」
「いや、別に気にしてないよ」

やっとのことで俺から離れた離れたナターシャは涙で顔をくしゃくしゃにしていた。
初めて会った時のイメージからは随分かけ離れている。
それが、面白かったのかは分からないけど俺は笑った。

「どうしたの？突然、笑って」

まだ少しの涙を浮かべながらナターシャはそう聞いてきた。

「なんていうか、ナターシャの顔が面白くて」

俺の言葉にナターシャは顔を赤くして両手で顔を覆った。
う～ん。そこまでされるほど、変なことは言ってないけど。

「ルークさん。それはナターシャ様の顔を馬鹿にしているのですか？」
「は？」
「もしも、そうなら残念ですがあなたには死んでもらいます」
「いやいや、違うから。なんとなくそう思っただけだって」
「本当ですか？」
「本当。馬鹿になんかしてないって」
「それならいいのですが」

ふぅ。たった1つの発言で命の危険に晒されようとは。
もう訳が分からないところまできてしまっている。

「それより、これからおふたりはどうするのですか？」

エレインがいう2人というのは当たり前だが俺とナターシャの事だ。

「どうするって言われてもなぁ」
「ルーク。私と少し話さない？いろいろ話したいことがあるの」
「分かった。俺はそれでいいよ」
「ありがとう」
「じゃあ、私はこれで失礼します。その前に最後にナターシャ様に伝えておく事があります」
「何かしら？」
「さきほどシェイン様がこちらへいらっしゃいました」
「シェインが？どうしたのかしら？」
「いつも通りナターシャ様に会いに来たのでしょう」

エレインの言葉を聞いてナターシャはちらっとこっちに視線を向けた。
俺は何の事だか分からなかったので気のせいだと思うことにした。

「今はどこにいるの？」
「今は王様に挨拶に行っています。後々、ナターシャ様の部屋におこしになると思います」
「そう。ありがとう、エレイン」
「いいえ。それでは、失礼します」

エレインはそう言うと歩いてきた廊下を戻っていった。

俺とナターシャの間には言葉がなくなり少し気まずい空気が流れた。
俺はどうにかしようと思い、なんとか話題を見つけた。

「ナターシャはシェインと仲がいいの？」

許婚になってるぐらいなのだろうから、良いだろうと思いながらも聞いてみた。

「え、ルークはシェインの事を知ってるの」
「一応ね。シェインに無理矢理ここに連れてこられたからさ」
「そう。仲は良い方だと思うわ。同じ年頃の友達って少ないから」
「そういえばシェインもそんなこと言ってたな」
「そんな事も聞いたの？」
「うん。多分、結構いろんなこと聞かされたと思う」
「そう。あの、えっと・・・。許婚のことも聞いたの？」
「聞いたよ。なんか嬉しそうに話してたよ」
「そう・・・」
「どうかしたの？ナターシャ」
「なんでもないわ。ルーク、許婚のこと聞いてどう思ったの？」
「どう思ったって言われても。まぁ、シェインだったら結婚しても悪くはないんじゃない？いい奴だと思うし」
「そっか・・・」
「ナターシャ、やっぱりどうかしてない？」
「大丈夫よ。それより、ルーク部屋に入りましょう。立ち話は疲れちゃうわ」
「それもそうだね」

俺はそう返事するとナターシャに続いて部屋に入った。

Chapter2－6：謝罪

ナターシャの部屋に入り適当に座ってと言われた俺は近くに椅子に座った。
ナターシャはテーブルを挟んで反対側の席に座った。
なんとなくナターシャと初めて会った日の事を思い出す。

「ルーク、本当にごめんね」
「え？どうしてナターシャが謝るんだ？」
「だって私があなたをここに連れてきたから辛い思いさせちゃって」
「別にナターシャが悪いわけじゃないよ。あれは、あいつが悪いんだから」
「アルスのことやっぱり怒ってるの？」
「そりゃあね。永遠に許すつもりもないよ」
「彼も悪気があったわけじゃないの」
「分かってるよ。そういうのが仕事なんだろうし。それでも、許せないから」
「そう・・・」
「あぁ。簡単に割り切れるようなことじゃないから」
「そうよね・・・」
「そういえば俺も、ナターシャに謝らないといけないことがあるんだった」
「私に？謝れるようなことはされた覚えは・・・少しあるかも」
う～ん。この場合はどっちを指すんだろう。
着替えを覗いてしまった事か？それとも嘘のことか？
顔が微妙に赤くなっているからおそらく前者に違いあるまい。
「ナターシャ、着替えのことではないよ。勿論、そっちも謝らない

といけないことだけど」
「え？それ以外に何かあったかしら？」
「うん。俺が城を出て行った時、ナターシャと最後に話したよね」
「えぇ。覚えているわ」
「その時に俺、ナターシャに嘘ついたから」
「・・・・・・・」

思い出したのだろうか？
ナターシャは黙り込み俺の話に耳を傾けている。

「また後でなんて言っておきながらそのまま逃げた。最低だとは思ってたけどどうしようもなかったんだ」
「・・・・・・・」
「本当にごめん」

俺は謝ってから深々と頭を下げた。
頭を下げて3秒ほどしてナターシャの声が聞こえてきた。

「いいの、ルーク。顔をあげて。あの時、一番辛かったのはあなたなんだから。私は気にしてないわ」
「でも・・・」
「それにあなたは約束を守ってくれたわ。今、こうして私とあなたは一緒にいるのだから」
「・・・・・・」

ナターシャの優しさに涙が零れそうになった。
でも、それを必死に堪えて俺は無理矢理、笑顔を作った。
そして最後に消え入りそうな声でお礼を言った。

「ありがとう」

お互いの謝罪のあと、俺達はいろんな話をした。
小さい頃の話だったり、いろんな話を。
そんな話を始めてから1時間が経ったころ、ドアをノックする音が聞こえた。

「誰かしら？」
「う～ん、分かんない。エレインじゃないかな」

俺の返事を聞きながら立ち上がったナターシャはドアの方へと近付いていく。

ガチャ

ナターシャがドアを開けるとそこにはシェインが立っていた。
う～ん。俺、微妙にシェインの存在忘れてたかも。

「あら、シェイン。お久しぶりね」
「久しぶりナターシャ。会いたかったよ」

そう言うと、シェインはナターシャに抱きついた。
ナターシャは一瞬、びくっとしただけで逃げ出す事は出来ずしっかりと抱きしめられていた。

「やめてよ、シェイン。ルークもいるのよ」
「久しぶりなんだからいいじゃん。僕たち許婚なんだから」

「駄目よ。とにかく離れて」
「分かったよ。ナターシャは相変わらず照れ屋なんだね」
どちからというとシェインが周りの目を気にしすぎてないだけって感じだけど。
まぁ、突っ込んでもしょうがないことだから、口には出さないでおく。
それにしても、さっきは気にならなかった許婚という言葉がやけに気になるのはどうしてだろうか？
「それにしても安心したよ。ナターシャが元気ないって聞いてたからさ」
「心配してくれてありがとう。でも、もう大丈夫よ」
「ねぇねぇ、僕が会いに来てくれたから元気になったの？」
「それはどうかしらね？」
ナターシャはシェインの質問を適当に流し、さっきまで座っていた席に腰かけた。
シェインは俺とナターシャの間にある、椅子に座ることになった。
「ルーク、さっきはごめんね」
椅子に座ったシェインが何の前触れもなしにそう言った。
「え、何が？」
「ここに無理矢理連れてきちゃって。僕はあんな事があったなんて知らなかったから」
「いいよ、気にしないでも」
「でも・・・」
「それに今は来て良かったと思えるから」

「本当に？」
「本当。だからシェインに感謝したいぐらいだよ」
「そっかぁ。それなら良かった」

この後、俺達は3人でいろんな話をしていた。
話は尽きる事なく、エレインが夕飯の呼びに来るまで続いた。

Chapter2－7：食事

話し込んでいた俺達はエレインに呼ばれ夕食の席に向かった。
俺はアルスがいないか探るように歩いてたがどうやら心配のしすぎのようだった。

「あれ、俺のご飯がないみたいだけど」

夕食の席に着いた俺は自分の席があることには安堵したが、どう見ても食べるものが俺の席には無い事に気付いた。
辺りを見渡せば皆の席には美味しそうなご飯が並べられていた。

「お前のなど、用意されてるはずがない」

突然、突っかかるようにそう言ってきたのは王様だ。
俺は、またこいつかよとうんざりしながらも表情は崩さず言った。

「でも、席は用意されているんですけど・・・」
「本当は用意したくなかったのだが、席だけは用意してやったのだ。ありがたく思え」
「ということは、俺は席に座って皆が食べているのを眺めるだけですか？」
「そうだ。この席にいられるだけでもありがたく思った貰わないと困る」

そう言って王様は嫌な笑みを俺に向けた。
う～ん。毎度、思うけどこいつは本当に王様なのか？
話せば話すほど、疑問は大きくなるばかりだ。

「お父様、こんなの嫌がらせだわ。エレイン、ルークのも用意してもらえる？」
「そうしたい気持ちはありますが。王様が・・・」
「大丈夫よ。お父様には私から言っておくわ。だからお願い」
ナターシャのお願いにエレインもさすがに断れなく1度、王様の方に目をチラッと向けてから頷いた。

「ナターシャ。こんな奴にあげる必要はないのだ。お前はこいつに何をされたか覚えていないのか？」
「あれはわざとじゃないわ。お父様は昔の事をいつまでも根に持つなんて器が小さすぎるわ」
「なんだと。私はお前の心配をしているというのに」
「それは分かっているわ。でも、私だっていつまでも子供じゃないもの」
「・・・・・・。この糞野朗、お前は私が直々に殺してやろう」
全ての怒りの矛先を俺に向けてもらっても困るんだけど・・・。
まぁ、今更そんなことを言ったって意味が無いのは分かっている。
とりあえず、シカトだ。
俺がそう思って黙っていると、シェインが話に加わってきた。

「ナターシャ、ルークに何されたの？」
この質問にナターシャは顔を真っ赤にして下を向いた。
確かに自分の口からは言いにくいことかもしれないだろうけど。
「こいつは、ナターシャの着替えを除いたんだ。そして、その罪を隠そうとナターシャを上手く丸め込んだのだ。私は、まだその方法をつかめてはいないが、恐らくナターシャの弱みを握っているのだ」

「えぇぇ。ルーク、そんなことしたの？」
「したとも。王である私が言うのだから間違いない。シェイン、お前からもこの糞野朗に言ってやれ。さっさと田舎に帰れとな」
内容のほとんどがでっち上げだ。
除いた部分は当たってはいるけど、まるで俺がわざとやったみたいだ。

「ルーク、最低だよ。僕は君を友達だと思ったのに」
「いや、ほとんどは王様の作り話だ。悔しい事に最初は当たっているけど、あれはわざとじゃない」
「本当？」
「シェイン、そんな奴のいう事を信じるな。こんな変態顔した奴の言葉など信じる価値はないぞ」
「ルーク、君がわざとナターシャの着替えを覗いたというなら僕は君を許すわけにはいかないよ」
「だから、ナターシャの着替えを覗いたのはわざとじゃない。それは断言する。間違いない」
「いや、お前はわざとナターシャの着替えを覗いたのだ。お前の顔を見ればそれは分かる」

う～ん。このままじゃ、この話し合い終わりそうに無い・・・。
俺がそう思った瞬間、突然ナターシャの怒りの声が聞こえた。

「もう、やめなさい」

俺たち3人はビクッとしてナターシャの方を見た。
ナターシャの顔を怒っていて、同時に赤くも染まっていた。
考えてみればやたら会話の中に「ナターシャの着替え」って言葉が多かった気がする。

恥ずかしくなる気持ちも分からないでもない。

「とにかく、お父様はルークを苛めるのをやめなさい。分かった？」

「はい」

王様が素直だ。

これじゃ、どっちが偉いのか分からないな。

「それならいいわ。それじゃ、食べましょう」

気付いたら俺の前にも皆と同じ美味しそうな食事があった。

これで、どうやら飯にありつける。

相変わらず睨んでくる王様をシカトしながら俺は食事を食べ始めた。

Chapter2－8：質問

食事の方は３０分ほどは何もなく進んでいった。
王様の睨みが相変わらずだったが、そこは無視を突き通した。
そんな雰囲気がおかしくなっていったのは、ナターシャの１つの質問からだった。

「そういえば、ルークは依頼の途中でここに寄ったのよね？」
「そうだけど、それがどうかした？」
「どんな依頼だったのか知りたいなと思って」
「簡単に言えば探し物かな。竜の祠にある魔法石を欲しいって頼まれて」

普通なら依頼の内容を簡単にばらすのはいけない事だった。
だけど、今の俺は少しばかり調子に乗っていたのか口がかるかった。

「おい、糞野朗。今、何て言った？」

話に加わってきたのは王様だった。
俺の呼び方は相変わらずだけど、今までと違い真面目な顔をしている。

「竜の祠にある魔法石を欲しいって頼まれて」

俺は一字一句変えずに王様に伝えた。

「それはいつの事なんだ？」
「一昨日の事です。昼頃だったと思いますけど」
「・・・・・・」

王様は悩んだ顔になり黙ってしまう。
一体、竜の祠に何があるんだろうか？
こんな事態になるとは微塵も思ってなかった。

「あの、どうかしたんですか？」
「小僧。お前に依頼してきた奴はどんな奴だった？」
「３０代ぐらいの男性ってことは覚えています。それ以外は特に何も」
「そうか」

結局、俺の質問には答えてもらっていない。
でも、もう１度聞けるような雰囲気ではないことを感じた。

「エレイン、アルスを呼んでくれないか？」
「畏まりました」

王様の命に従いエレインが部屋を出て行った。
俺は止めさせたかったが今の雰囲気では無理だった。
どうやら、これから凄いことが起きる様だ。
まったく、見当がつかないのだけど・・・。

「小僧。お前は竜の祠がどんな場所だか知っているのか？」
「いいえ。名前だけなら知っていましたけど」
「そうか・・・。なら、今教えておくべきだろう。どうやら、お前もこれから起こる事に関わるのだからな」
「これから起こること？」
「そうだ。とにかく、竜の祠の説明からにしよう」
「・・・・。分かりました」

いままでと違う王様の対応に少し戸惑いながら俺は返事をした。
こういう事態にはどうやら王様としての威厳がしっかりと出るようだ。

「竜の祠は、代々王家が守ってきた魔法石を守っている場所だ。その歴史は大昔に遡るが、今はその説明は必要ないだろう。この魔法石はあまりに強大が故に、使いこなせる人は世界中でも少ない。いや、今の時代もしかしたらいないのかもしれない。１５年前に起こったヴィシュラートの乱の時もこれを使う話も出たのだが、使いこなせる人が存在しなかった。」

それほどに、大きな力を持った魔法石だったとは。
あの依頼人はその事を知っていたのだろうか？
仮に知っているとしたら、俺みたいな奴に頼むだろうか？
もっと、大きな店に行けば実力者などいくらでもいたはずだ。
つまり、俺に頼んだ理由は大きな店には頼めない理由があったからになる。
おそらく、どこかへ伝えられるのは恐れたのだろう。
大きな店に行けばそれなりに知識があるに違いない。
俺とは違い竜の祠のことも知っていて王家へと連絡するだろう。
それを避けたかった。だから俺に頼んだ。
でも、この説には問題点もある。
依頼人は竜の祠に魔法石の力を知っているはずだ。
そんな、強大な物を守っている場所を俺が取ってくるなど考えれば不可能だとすぐに分かる。
それなら俺に頼むのは馬鹿でもしないことだ。
一体、何か理由はあったのか？

「竜の祠についてのことは分かりました。でも、これから起こる事ってなんなんですか？」

「ヴィシュラート一族との戦いのことだ」
「え？」
王様の意外な答えに俺は驚いた。
まさか戦争が起こるなんて考えてもみなかった。
でも・・・。
よく考えてみれば頷ける話かもしれない。
今、あんな強大な魔法石を欲しがるなんてあの一族しか思いつかない。

「お前に依頼を頼んだ男、おそらくヴィシュラート一族だろう」
「俺も王様の話を聞いてそう思っていたところです」
「だろうな。あの魔法石を欲しがる者など、戦争を起こしたいやつぐらいの者だ」
「でも、１つ気になります」
「ヴィシュラート側にその石を使いこなせる人間がいるのかどうかか？」
「はい、そうです」
「それは私にも分からない。しかし、相当な実力者がいるのは確かだろう」

食事の場の空気はまるで凍り付いていたようだった。
誰もがこれから起こる事を予想して嫌な気分になっていた。
もちろん、俺もその１人で既に食事など喉に通る状態ではなくなっていた。

Chapter2－9：計画

「王様、私に何か御用ですか？」

そう言ったのは、ついさっきここにやってきたセリュースという人だった。
おそらく30代前半に間違いない。俺の予想ではアルレイン四聖の1人だ。

「今すぐに、部下を連れて竜の祠に向かってくれ」
「竜の祠にですか？」
「そうだ。ヴィシュラートの人間が動いている」
「そうですか。しかし、あそこには守り神として竜、それと結界が張ってあるのだから大丈夫なのでは？」

竜の祠には結界もあるのか。
おそらく、相当な実力じゃない限り破る事はできないだろう。
これで俺が魔法石を取れる可能性は万が一もなくなったな。

「確かにそうだが、念を入れておくに越した事はない。あれが相手の手に渡るのは避けなければならない」
「分かりました。すぐに向かいます」

そう言うとセリュースは部屋を出て行った。
セリュースが部屋を出て行くのを見届けてから王様が俺の方を向いた。

「小僧、お前はこれからどうするつもりだ？」
「特に何もしません。戻って依頼の失敗を告げるぐらいです」

「そうか。お前に1つ頼みがあるのだが」
「何でしょうか？」
普段なら反発するところだが状況が状況だ。
「依頼の失敗を告げるのは3日後にしてほしい」
「どうしてですか？」
「おそらく、次は自分達で乗り込んでくるに違いない。お前を送ったのはあくまで竜以外の邪魔するものがあるかどうかを調べる為にすぎないだろう」
なるほど・・・。
だから俺を送り込んだのか・・・。
「その3日の間に竜の祠の警備を強化する」
「強化ですか？それに3日もかかるのですか？」
「そうだ。お前は竜の祠が魔法石を守る上で一番大切なのは何だと思っている？」
「え・・・。竜じゃないんですか？」
「違う。一番、重要なのは結界だ。竜は時間稼ぎにか過ぎない」
「時間稼ぎですか」
「そうだ。竜といっても上級魔法が使えるものならば苦戦しても倒せない事は無い。しかし、結界は破ろうとしても、すぐにここに情報が入る。そういう魔法をかけてあるからな。つまり、竜は魔法使いが送られるまでの時間稼ぎにしかすぎないということだ」
そうだったのか。
てっきり、竜が魔法使いを簡単に追い払うもんだと思っていた。
「でも、一体何の準備をするんですか？」

「さっきも言ったようにおそらく、次はヴィシュラートの人間が直接やってくるだろう。そこを狙ってあらかじめ結界内にアルレイン四聖を始めとして魔法使いを大勢送り込んでおく。そこで、ヴィシュラートの奴らを捕まえる」

なるほど・・・。
以外に単純な作戦だけど上手く行くかもしれない。
相手は結界内に人がいるのは予想外な出来事だろう。

「分かりました。依頼人への報告は3日後にします」
「たまには、話が分かるではないか糞野朗」

そう言うと、王様は馬鹿にしたように笑い出した。
う～ん。なんていうか切り替えが早いな。
良く言えば冷静って事なのかもしれないけど。
とりあえず嫌な奴・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8311e/

ルークの長い旅

2010年10月10日07時33分発行